

～あした、転機になあれ!～

美し島から... 哲楽さびら。

職場を元気にする哲楽レシビ その十五

「うたのチカラ」を哲楽すると...

研修では緊張しても
歌ではリラックス

「言葉」にメロディーとリズムが
加わるだけで、こんなにも伝わり方
が変わるなんて!

このところ「うた」の持つ力を実
感し、驚いています。

コーチングを学ぶ前、私は、電子
オルガンの演奏家として、仕事をし
ていました。研修講師としての活動
が中心になってからは、音楽活動は
休んでいた時期もありましたが、昨
年、研修を担当していた企業から
テーマ曲やコーマーシャルソングの制
作のご依頼をいただき、思いがけず
歌も歌うようになりました。はじめ
は「曲は作るので、どなたかに歌っ
てもらってください」とお願いした
のですが...

「スタッフはみんな、紀々さんの
声で元気になるのですから。研修で
学んだことも思い出さずはです」

そう言われてしまうと、どうして
もNOとは言えませんでした。

「研修で皆さんから聞かせても
らった現場の声や、私が現場で肌で
感じたこと、そして、皆さんにお
伝えしたいメッセージを歌にしよ
う!」と考えて仕上げ、職場の皆さ
んにもレコーディングに参加してい
ただくことに。コミュニケーション
研修の一環、そんなイメージで取り

組みました。

すると、不思議なことに気がつき
ました。まずは、研修とはちがう空
気感。どうしても研修となると緊張
しがち。歌うときの皆さんは、と
てもリラックスして、いつもの仕事
中とは別のワクワクした空気があり
ました。部署や肩書きを越えた一体
感も。

もう一つは、伝わる速さ。研修で
の内容は、報告が行き渡るまでに一
定の時間がかかるのですが、歌の場
合は、あつという間に覚えてくれ
ていました。「売場以外でも歌ってし
まって、大変です!」という笑い
話も。報告・連絡というより、「伝染」
に近いスピードでした。

そして一番は、「忘れない・離れ
ない」こと。

「研修で学んだことって、どうし
ても時間がたつと忘れちゃうんです
よね!」と、研修でしばしば共通の
つぶやきに出会いました。研修室の
ドアを出た途端に「いつも通り」に
戻ってしまったという声もあり、資
料を持ち帰っても、二度と開いても
らえないどころか、会場に忘れられ
てしまっている場面に切なさを感じ
ていた私。

どうすれば少しでも持ち歩いても
らえるのだろうか?

観察してみると、食事や飲み会な
どで「ねえ、これ知ってる?」と出

されるメモは、だいたいお財布か手
帳名刺入れから出てきていました。
そこに入るサイズなら持ち歩いても
らえるかも!と考えた名刺サイズの
カードは、とても好評です。

伝え方より伝わり方
工夫してみませんか

「忘れないで!」と言うだけでな
く、「忘れられない工夫」をするこ
とが大事だと感じます。私にとつて、
企業のための音楽づくりも「忘れら
れない仕組みづくり」のひとつ。何
を伝えるかよりも「どう伝えるか」
が、伝わり方を左右するような気が
します。

「あれから、あの曲が頭から離れ
なくて大変です!」と、スタッフの方
々々ももとより、お客さまがプログ
にも書いてくださって...。その
反響の大きさにビックリ。これまで
私が担当したどの研修よりも、効
果と反響が大きいのではと思うと、
ちよつと複雑ですが(笑)。

会話・対話と音楽は、とても共通
しています。音の高さ・リズム感や
速さがあつて、歌詞がある。音の強
弱やゆらぎ、強調する部分・弾む部
分などの表現や、その効果もさまざ
ま。歌詞は、その中のほんの一部。
人は、楽器と同じ。一つの曲を奏
でて、持ち味はそれぞれ。その奏

器の魅力を活かすアレンジも大事。
複数の人が一緒に集う会議は、ア
ンサンブル。美しい和音・息の合っ
た演奏を目指したいものです。その
ためには、相手の音をよく聴くこと
もポイント。演奏だけでなく「聴く
力」の大切さは、どこでも共通です。
対話は「うた」である。そんな視点
で、哲楽してみませんか?
あした、転機に、なあれ!

あなたも
コミュニケーション...
どんな音楽?



紀々(きき)

哲學家。那覇市出身。1998年に早稲田大学第一文学
部哲学科東洋哲学専修を卒業。「自ら考え、自ら動く
力を磨く社員研修を」との依頼を受け、「哲楽のチカラ
を、笑顔のチカラに」をテーマに、さまざまな企業
現場でサポートを行っている。特に「若手リーダー・
女性スタッフがイキイキ元気に働ける職場づくり」を
哲楽する研修は、好評。現在は、沖縄の表現で「Let's
哲楽」を意味する「哲楽さびら。」を合言葉に、沖縄
発で職場に哲楽習慣・風土を広めるべく活動を展開中。